都市エスニシティ研究の再構築に向けて ——都市社会学者は何を見ないできたのか——

Toward a Reconstruction of Urban Ethnic Studies: A Critique

樋口直人
HIGUCHI Naoto

This paper critically examines studies on Japan's urban ethnicity, focusing on the limits of the Chicago paradigm dominating this field. The defects of the Chicago school involve disregard of structural and institutional factors such as the state and the market. The disregard of the state apparatus results in overlooking the securitization of migration in the last decade. In addition, the lack of labor market analysis leads to a superficial understanding of migrant communities. The author suggests two alternative approaches that make full use of legacies of urban sociology: (a) bringing the state and market back in by way of the new urban sociology and (b) uniting subfields of urban sociology with the notions of space and place.

1. 都市エスニシティ研究とは何か——問題の所在

本稿の目的は、都市社会学におけるエスニシティ研究を批判的に検討し、その再構築に向けた方向性を提示することにある。日本の都市社会学者は、都市エスニシティ研究という言葉をよく用いるが、それはどのような特質を持つのか。都市社会学者と自己規定する者がエスニック現象を研究するからといって、それが自動的に「都市エスニシティ研究」になるわけではない。エスニック現象は、多くの場合都市において発生する。移民の多くは都市に集中するし、ナショナル・マイノリティであっても都市に移動することでエスニック関係が問題化するからである。

だとすると、「都市」と冠する意味は何なのか。日本の都市社会学におけるエスニシティ研究の特徴として、まずもって古典的なシカゴ学派パラダイムへの依拠が強い点が挙げられる。これは移民・エスニシティ研究一般にはみられないものであり、それが現時点での都市エスニシティ研究の独自性といってよい。そこから帰結する研究上の特質は、(1) 構造的・制度的文脈から切り離された「地域社会」という分析単位の設定、(2) 「生活世界」の描述によるモノグラフ志向の強さということになる。

このうち(2)のモノグラフは、同時代のエスニックな生活世界に関する記録の蓄積という点で、都市エスニシティ研究の厚みを増すものと評価しうる[e.g. 藤原 2008; 李 2000; 二階堂 2007; 奥田 1997; 渡戸・広田・田嶋 2003; 山本 2008]。しかし、全体にデータ収集の質量が不十分であるばかりか、調査に関する情報開示も十分でないなど、労力や手続といった点で疑問を感じさせるものが多い。さらに重要な点として、こうした著作では少数の事例の列挙→安易な経験的一般化が繰り返されており、理論的な知見の蓄積は乏しい。そのため、本稿では(1)の論点に限定して都市エスニシティ研究の問題点を検討し、それを克服しようとする研究の方向性を提示する。その際、それぞれの論者に対する外在的な批判で終わらせないために、可能な限りその論者と同じ土俵に立ち、フィールドから

みえる別様の展開の可能性を提示する方針をとる。

2. 国家と市場の欠如がもたらすもの——シカゴ学派的把握の帰結

(1) 国家と市場の欠落

シカゴ学派は、人間生態学と相互接触という枠組みに社会構造的視点が欠けていると批判されてきたが、これは日本の都市エスニシティ研究についても当てはまる。第1に、パークの人種関係サイクル論に親和的な議論として、「共生」という概念がある。両者に共通するのは、集団間の相互接触がエスニック関係を規定するとみなす点にある。第2に、その帰結として国家や市場といった構造的・制度的変数が分析に組み込まれないか、せいぜい外在的にしか扱われない⁽¹⁾。

こうした特徴は、特に奥田道大と彼に連なる研究者に典型的にみられる。経験的な都市エスニシティ研究の先鞭をつけたのが、奥田道大であることは誰もが認めるところだろう。奥田やその教えを受けた広田康生は、シカゴ学派的な視点に忠実な都市コミュニティ論を展開しているだけに、本稿の趣旨からするともっとも重要な検討対象となる。1980年代後半以降、奥田らのグループは池袋・新宿調査を継続し、広田らは独自に他の地域での調査を進めていった。こうして調査は蓄積されていったが、彼らが描き出す都市コミュニティは、筆者からすると現実との乖離を強めているように思われる。

彼らは、在日外国人の生活基盤が整備されており、その背後には移住者を包摂する成熟した都市コミュニティがある、という予定調的な結論を繰り返す。しかしこうした見方の固定化は、彼らがフィールドで本来見出せたはずのものから眼を閉ざす結果を招いているのではないか。以下、奥田については国家という変数の欠落が、広田については市場という変数の欠落が、何を見ない結果をもたらしているのかを論じたい。

(2) 国家の不在——「都市共生」と「国家統制」の間

まず、奥田らによる池袋・新宿調査の前提をたどることから始めよう。奥田のアンソロジーにおいて、都市エスニシティと都市コミュニティに関する論文が並存していることからわかるように⁽²⁾、彼のエスニシティ論は都市コミュニティ論の延長としての性格が強い⁽³⁾。それを反映して、彼らはおおむね以下の2つの前提で調査を行っている。

外国人労働者を外国人居住者という観点に置きかえてみた場合、「開国」か「鎖国」かの議論をこえて外国人居住者は地域社会レベルではすでに実体化している。[奥田・田嶋 1991: 20、傍点は引用者]

彼らが「不法」滞在者であろうとなかろうと、彼らが「資格外」就労者であろうとなかろうと、私たちは居住生活者個人として対面した。[奥田・田嶋 1993: 303、傍点は引用者]

地域社会を分析単位とし、法的資格に関係なく外国人を居住者として扱う。これは、「あくまで地域『住民』であることに基点をおきつつ、同時に地域を開く『市民』であることの可能態が射程に入った」[渡戸 2003: 416]という奥田都市社会学のモチーフに沿ったものだろう。その結果、都市インナーシティにおいて「共生の作法」が規範となり、外国人を受け入れる「地域社会の懐の深さ」がみられるという⁽⁴⁾。

だが、はたしてこれは現実をきちんととらえているのか。一連の調査報告を好意的に読めば、「不法」と「資格外」とを問わず共生の実態が存在することを訴えているともとれ

るだろう。居住実態から出発する立場をとるならば、法的地位と住民としての地位を区別するのは、1つの見識として理解できる。しかし、住民や国家がそうした見方をとらないとしたら、事態はどうなるのか。

すなわち、地域社会での「共生」が進むとされる池袋や新宿は、国家権力の集中的な行使により多くの非正規滞在者を排除してきた地域でもある。新宿区の久保地区では1992年に自警団ができていたし、彼らが新宿調査を行っていた頃の地域社会の光景は、著作から読み取れるものとは大分異なっていたように思われる。その当時、新宿から新大久保を経て大久保駅まで歩いていけば、それこそシカゴ学派的なモノグラフが描いたような売買取やあやしい商売がそここにみられた。そこに警察力を投入して「街の浄化」を行った結果、表面的には「共生の作法」が成立しているようにみえたかもしれない⁽⁵⁾。実際、現在では大久保の持つ猥雑さは「浄化」され、日本版エスニックタウンのモデルとなっている。

しかしそれは、「逸脱」とは共生したくないという地域社会の意思と、国籍・人種・民族を単位とする排除統制のメカニズムを作動させたい国家の意思がないまぜになった結果だろう⁽⁶⁾。ところが、奥田の仕事では「共生」に都合の悪い地域社会の現実が登場しないばかりでなく、警察という国家機構が無視されている。その結果、「ものわりのよい住民」と「生活基盤を築く住民としての外国人」「トランスナショナルな現実を生きる外国人」という構図だけが、年々固定化されていく⁽⁷⁾。

大久保地区が、警察によるニューカマー外国人取締りの先駆例となったことは、調査するまでもなく夜間にこの地区を歩いてみれば気づくはずである。にもかかわらず、「新宿のアジア系外国人」を綿密に調査したはずの論者がなぜふれないのか。見落としたとは考えにくいので、自らの図式に都合の悪い現実を意図的に隠蔽したと考えざるを得ない。このように現実を隠蔽した結果として、都市エスニシティ論はどのような代償を払ったのか。それは、9.11同時多発テロ以降急速に注目度が高まった「セキュリティと移民」というテーマを見逃したことである。池袋や新宿には、「治安維持」的な関心から国家が介入する現実があり、セキュリティという観点からみた多民族コミュニティの困難を先駆的に議論するデータは集まったはずではないだろうか。

しかし奥田らは、自らの図式に固執して空想の地域社会を作り上げることで、そこから目を塞いでしまった。それは一方では、石原慎太郎・東京都知事が執心する外国人犯罪の取り締まりという、「国家による地域社会への介入」を分析する視点を持たなくした。他方では、「近隣を安全にする」[Quassoli 2004] ための外国人排斥という「もう1つの地域社会像」——それは国家の欲望と絡み合うという構図をも描けるのだが——を完全に欠落させた⁽⁸⁾。2000年以降、外国人に対する排斥基調が顕著になり、外国人犯罪に関連する文献も増加している。これを全国的な傾向だとすると、1990年代前半に大久保地区に存在したのは、日本全体の10年先をいく事態ではなかったか。

こうした先駆的な現実を無視し、警察という国家による介入を体现する要素を組み込まなかったことで、都市エスニシティ論は大きな代償を払うこととなった。「外国人犯罪」という錦の御旗を得て、治安当局は都市社会のエスニックな再編に介入し、その結果として今の久保地区が存在する。しかし、セキュリティという側面から都市社会学は何らの発信もできず、酒井隆史[2001]のような現場を持たない論客がその肩代わりをすることとなった。これは、都市コミュニティ論の新たな領域開拓という面でも、都市社会の実証

分析という点でも大きな損失である。

(3) 市場の不在——「越境者－エスニシティの鶴見」と「のしあがりの鶴見」の間

次に、広田康生〔2003〕の鶴見調査を例として、市場という観点の欠落が何を見失わせるのかをみていこう⁽⁹⁾。広田の鶴見調査報告で登場するのは、日本社会を越境移動のひとつの拠点とする人々たる「越境者－エスニシティ」⁽¹⁰⁾と、彼らを受け入れた地域住民たる「共振者」である。越境者－エスニシティとは、広田の著作ではエスニック・ビジネスを営むかアソシエーションを組織する南米系移民を指す。広田の著作が肯定的に引用される際には、この越境者－エスニシティと共振者が望ましい関係のモデルとして言及されることが多い。では、こうした関係は鶴見という都市コミュニティを理解するうえでどの程度妥当なものだろうか。

広田〔2003〕の名高いエスニック・ネットワークの図には、越境者－エスニシティと共振者が作り上げたさまざまな制度が描かれている。「共振者」という命名が示すように、広田の特徴は両者の接点を中心に鶴見の南米系コミュニティを描き出そうとする点にある。だが、不思議なことに広田の著作では、鶴見の南米系コミュニティが他の集住地と比較して稀な特質を持つことは指摘されない。そもそも首都圏に住む南米系移民のほとんどは、郊外にある自動車・電機・弁当工場で働いている。都市インナーシティたる鶴见到多くの南米系移民が居住するのは例外で、都市社会学者ならばこの点に着眼すべきではなかったか。というのは、鶴见到南米系移民が集住する経緯をたどれば、鶴見が特徴的なコミュニティを形成していることがわかるからである。

この地域に南米から最初に流入したのは、ボリビアのコロニア・オキナワ出身者であった。沖縄移住地とも呼ばれるこの地には、1950～60年代にかけて琉球政府の計画移民が渡ったが、そのほとんどは沖縄に引き揚げるか、ブラジルかアルゼンチンに転住している。しかし、コロニアで苦楽を共にした者同士の仲間意識は強く、転住後も連絡を保っていたため、その後に鶴见到連鎖移民が生じている。最初にコロニア・オキナワ出身者が働いたのは広田というSR電設という電気工事業者であるが、1987年時点でこの業者には20名程度の従業員しかいなかった。それがバブル景気を受けて急成長し、1989年には300名に、最盛期の1994年には500名近くが働くようになる。この人手不足の時期に急成長できたのは、コロニア・オキナワ出身者のネットワークを利用して南米から求人できたからである⁽¹¹⁾。

鶴见到近辺には、海岸沿いに工場も多く存在するが、そこで働く南米出身の男性は少数で、ほとんどの男性が今なお電設業で働いている。他地域では製造業に特化している南米系移民が、鶴见到では電設業に特化しているのはなぜか。鶴见到の日系人労働市場についてこうした疑問を持ちさえすれば、コロニア・オキナワを基点としてブラジル、アルゼンチン、鶴见到へと連なる移民ネットワークがみえたはずである。梶田孝道らは、在日ブラジル人が起業する際には、日本で新たに知り合ったブラジル人か日本人（広田の言葉でいう共振者）の役割が大きいと指摘した〔梶田・丹野・樋口2005〕。しかし、鶴见到の電設業者のほとんどは、コロニア・オキナワから持ち込んだ社会関係を生かして起業してきたのである。

こうした結果の違いは、他地域で働く南米系移民が出身国での社会関係から切り離され、日本で形成したネットワークに依拠せざるをえないことに起因している。その意味で鶴见到は、教科書的な連鎖移民とそれを利用した自営業への進出を可能にした、日本の南米系コ

コミュニティでは特異な地域といえよう。つまり、越境者—エスニシティ内部での資源動員が鶴見では重要であり、広田が重視する共振者の役割は相対的に小さかったのである。

鶴見を歩けば、レストラン、日本語教室、学校など、広田のいう越境者—エスニシティと共振者が接点を持つ制度は確かに存在する。しかし、それは鶴見に限ったことではなく、外国人の集住地ならばどこでもみられる光景といってよい。むしろ、「リトル・ブラジル」と呼ばれるようになった大規模な集住地たる浜松市や大泉町のほうが、多様な下位文化が花開いている。鶴見の特徴は、そこが「リトル南米」ではなく「リトル・コロニア・オキナワ」である点にある。コロニア・オキナワは、1960年代からの転住により、サンパウロやブエノスアイレスに「姉妹コミュニティ」を持つに至った。それが1980年代後半以降は鶴見まで広がり、4カ国にまたがる「地域労働市場」の受け皿となっている。

このような労働市場の相違という前提条件を踏まえて初めて、鶴見というまちの特質がわかる。社会的ネットワークという観点からみたとき、鶴見の南米系移民の特徴は、まさに姉妹コミュニティとして移民同士の濃密な人間関係が息づいている点にある。しかし広田は、可視的な制度にのみ着目した結果、鶴見の特徴ではなく南米コミュニティならばどこでもみられる側面にしか迫れていない。

さらに鶴見は、ほとんどの男性が電設業に従事するのみならず、そこから自営業へと「のしあがる町」としての性格を持つ〔樋口・稲葉 2010〕。1990年前後に独立した南米系電設業者は、一世で日本語が堪能であり、空前の人手不足を背景に起業が可能であった。その後、広田のいうSR電設が1995年に倒産してできたニッチを利用して、経験を積んで技術を身につけた二世が独立している。さらに、2000年以降には電気工事士の資格を取って起業したり、一人親方になった若い二世が進出した。

複数の業者の話によれば、看板を出して営業する鶴見の南米系業者は30軒、一人親方などを入れれば50軒が独立して電設業に従事している⁽¹²⁾。他地域の南米系コミュニティでは、同胞市場を相手にした商売か、同胞労働力を売り込む派遣業者以外、自営業に従事するのは難しい。それに対して、電気工事士としての熟練形成と独立という経路が存在する点で、鶴見は他の南米系コミュニティのモデルとなる特質を備えている。しかし広田は、自らの図式に固執するあまり鶴見の特質を見出せず、他地域と並列してコミュニティの発展を描き出すという平板な議論を繰り返すこととなった⁽¹³⁾。

3. 都市社会学の遺産と都市エスニシティ研究

シカゴ学派的パラダイムが、国家と市場という変数を欠落させることで失うものに関して、これまで議論してきた。だが、都市エスニシティ研究に援用しうるのは何もシカゴ学派都市社会学に限らない。重要なのは、シカゴ学派一辺倒の現状を相対化し、都市エスニシティ研究を発展させるうえでもっと使用しうる遺産を掘り起こすことだろう。本節ではそうした可能性に関して2点提示する。

(1) 団地問題の新都市社会学的解釈

南米系移民に関する都市社会学的な研究には、広田のようなコミュニティ／ネットワーク論の他に、団地への集住を扱うもう一方の潮流がある。このうち都築くるみの議論は、社会科学的な推論の筋道が欠落している部分が多いように思えるが、当該問題に関する代表的な論者とみなされるがゆえに本稿でも検討する。

都築は、「共生」をキーワードとして豊田市保見団地のエスニック関係を1990年代前半から調査してきたが、年を追うごとに移民排斥的な論調が強まっている〔梶田・丹野・樋口2005〕。そうした彼女の視座を象徴するものとして、以下のような記述がある。「問題は山積、それを気にかけているのは『少数派』となった日本人住民なのである」〔都築2006: 131〕。ここで日本人を「少数派」というのは、彼女が「団地」という分析単位以外想定しないからに他ならない。少し単位を拡大して「豊田市」としただけで、南米系移民は社会経済的のみならず人口的にも圧倒的な少数派となる。都築の眼に映るのは、団地の中で「多数派」となった南米系移民が「自分たちの生活を思う存分楽しめる空間」〔都築2006: 130〕だけのようである。しかし、そのような把握に固執した結果、共生の可能性を探求していたはずの都築は「約3800人の日系人を抱えるH団地がいかに異常な空間であるかがわかるだろう」〔都築2004: 49〕と、排外主義的な評価を下すところまで追い詰められている。

「団地」だけを分析単位として眼前に見える問題を表層的に把握し、それを解こうとあれこれ模索し、それが破綻すると排外主義に傾いてしまう。都築自身が無自覚のうちに陥る排外主義を相対化するには、マヌエル・カステルの以下の批判が有効である。

社会学的機能主義の核心的問題は社会統合の問題であり、浮き草の移民大衆を資本主義都市の生産機構へ統合し、階級的に訓練する必要性に照応している。…総体としてのシカゴ学派の業績はこのテーマで占められている。今日、都市の基本軸として権力を認識することは、完全に見せかけの問題とすりかえられ、それゆえにまたこの問題に答えるために必要な商売道具とすりかえられているのである。〔Castells 1978: 訳10〕

新都市社会学はシカゴ学派へのアンチテーゼとして登場し、国家による都市の規定性を強調した。代表作たるカステルの『都市問題』〔Castells 1978〕は、生硬なまでに構造論的な立場をとっている。こうした構造論の遺産を、都市社会学の問題設定に生かすことはできないのか。そう考えると南米系移民の団地問題は、集合的消費が引き起こす問題の典型例として浮かび上がる。たとえば、カステルの以下のような把握は団地問題が生じる背景を知る上で示唆的だろう。

居住の場所の配置は生産物の配分の一般的法則であり、したがってまた、主体の社会的能力つまり資本主義システムにおける彼の収入、職業的身分、教育水準、所属する人種、生活サイクルの段階などに関連して、その再編成をおこなう。…社会的差異が強固な空間的表現をもつ場合には、都市隔離について語ることができる。〔Castells 1977: 訳159〕

ジョン・レックスらが提起した住宅階級の議論は、概念的曖昧さなどから結局は定着しなかったが、そこでの主たる関心が人種による住宅の不平等だったことは想起されてよい。そこでは、住宅をいくつかのランクに区分したうえで、人種差別が特定の住宅への移民集中を促すとした〔Rex 1973〕。そのアナロジーでいえば、都築のフィールドである豊田市保見団地が住宅階級上かなり低い位置にあることは間違いない⁽¹⁴⁾。

そもそも豊田市における住宅供給は、トヨタ自動車の地域政策と密接な関連を保ってきた。端的に言えば、トヨタ自動車が急増する労働者に対して自社で供給できない住宅を、市営・県営・公団団地という形で国家が供給してきたのである〔遠藤1988〕。保見団地は、トヨタ自動車が持家制度を採ったことにより不足する賃貸住宅を補うべく供給されたが、予想を下回る需要しかなく当初から空室が発生していた〔都丸・窪田・遠藤1987: 176-7〕。

これは、場所の不便さが大きく作用しており、南米系移民が大量に入居できたのもそうした背景があったことは、都築自身も言及している。

高度成長期には、トヨタ自動車の成長により発生した住宅需要に対して、トヨタ自動車自体が供給できない部分を国家が供給した。同時に、雇用企業の規模によって住宅階級に差があることが指摘されており、トヨタ自動車本体の手厚い援助から漏れた下請け企業の労働者層をカバーしたのが、国家による住宅供給だったといえる。いずれにせよ、この時期の労働者増に対しては、トヨタ自動車なり国家なりが新規の住宅供給を担ってきた。だが、ブラジル人を中心とする南米系移民の増加に際しては、老朽化して魅力を失った住宅をあてがっている。かかる経緯を考えると、団地問題に対して新都市社会学的視角を導入することにより、次のような見方が可能となるだろう。

第1に、南米系移民に対しては、レックス [Rex 1973] がゲッター形成の原因としたような住宅差別があるとは必ずしもいえない⁽¹⁵⁾。しかし、非正規雇用が大多数を占め正社員への登用がほとんどない不安定雇用たる性格が、住宅階級の低さに結びついているとはいえる。保見団地の公団住宅部門で南米系移民の集住を生んだのは、空き部屋を法人に賃貸する仕組みであった。そこで主な借り手となったのは南米系移民を雇用する派遣会社であり、不安定就労層にあてがわれる住宅としての法人貸しが南米系移民を主たる対象とした段階で、雇用・住宅・エスニシティが折り重なる。この場合、団地問題の根源はエスニックな差異よりもむしろ、保見団地のような住宅階級の低い地域に不安定就労層＝南米系移民を押し込める構造にあるという見方ができる。

第2に、高度成長期の遊休資産を用いることにより、企業も国家も南米系移民の増加による住宅コストの負担を免れている。貸手からすれば、南米系移民は不良資産となっていた住宅の稼働率を高めてくれるありがたい存在である。集合的消費手段の費用を節約できるわけだから、南米系移民は労働力再生産費用を含めればきわめて安価な労働力として使用されていることになる。

第3に、かかる条件を考えると日系人の「団地問題」は、介入主義的国家を前提とするカステルの枠組みだけでは解決を展望できない。放置された団地の活用の背景には、国家介入というよりはポスト福祉国家段階で縮小した国家役割がある。このときの対策は都築とは異なり、南米系移民に責を帰すことにはならない。文化的多様性の費用も含め労働力再生産に見合った投資を行うこと必要で、福祉国家論の現状を考えれば福祉ミックスのような発想が政策的処方箋となるだろう。都市社会学者が注目する移民ネットワークも、互酬や自助を含む福祉ミックスと組み合わせると構造的状況との接合がなされうる。

筆者自身は新都市社会学を奉じるものではないが、構造を欠いた分析が往々にして文化対立に逢着することには、移民研究者として自覚的であるべきと考える。そうした観点からすると、新都市社会学は都築が陥った隘路からの脱出口を示しうるし、それを生かした団地問題の分析がこれまでないのが不思議なくらいだといえよう。

(2) 世界都市論・野宿者研究・都市エスニシティ研究の間

ジョン・フリードマン以来の世界都市論では、サービス経済化と下層サービス労働部門への移住労働者の流入が重要な要素として挙げられている。こうした議論の妥当性は、日本でも世界都市論の妥当性をめぐる重要な検証素材とみなされてきた。現に、世界都市論を東京の現実により包括的に検証した町村敬志 [1994] と園部雅久 [2001] は、著作の中

で外国人居住について1章を割り当てている。彼らはマクロな社会変動を背景とする構造的な説明図式に依拠しており、これまで検討してきたシカゴ学派的な都市エスニシティ論とは異なる知見を導出しうるものと評価できるだろう。

しかし、世界都市論の枠組みから東京で生じうる現実を推論し、新たな発見を試みる姿勢は両者ともに欠如している。町村は、外国人登録のデータから地理的分布をなぞり、園部は大久保地区にみられる移住者の活動を紹介したにすぎない。2人とも、世界都市論を枕におきながら、外国人登録と大久保地区という移住者が可視化した部分にのみ着目し、表面化した「結果」を世界都市論と関連づけて解釈するに留まる。

一方で、1990年代以降急速に注目を浴びて研究アウトプットも増加したのが、都市下層研究である。この時期の都市下層研究にとって象徴的な意味を持つ新宿駅西口には多くの野宿者が集まり、1990年代半ばにはダンボール村が形成された。それらについては多くの報告があり、野宿生活について教条的でない知見が蓄積されてきたと評価しうる〔岩田2000; 北川2001, 2002a, 2002b; 山口1998, 2006〕。

だがこれらの成果は、少数の例外を除けば「都市」を冠から外した「下層研究」としても何ら問題ないようにみえてならない。筆者が違和感を持つのはこの点にある。多くが都市社会学者を自認する研究者が、実際には下層集団研究しか行っていないのはなぜか。都市で多く現出する現象を分析するのが都市社会学の自己定義になるのであれば、それは領域固有の理論と方法を放棄するに等しい。

では、都市社会学の蓄積を生かして独自の貢献をするにはどうすればよいか。まず、世界都市論、都市下層研究、都市エスニシティ研究の分断状況を自覚する必要がある。これらは、相互にかなり関わっているはずなのに、内在的な相互言及はほとんどなされてこなかった。都市下層研究の立場から3者に言及した青木秀男〔2001〕にしても、それらを並存せしめにとどまり、釜ヶ崎の報告でも統一的な視座はみえてこない。

しかし、3者が交錯するフィールドは、実は意外に存在するのではないか。たとえば、かつて野宿者が集っていた東京の新宿駅西口では、1988年から南米系移民が清掃員として働いている〔樋口2007〕。新宿駅西口から都庁方面に至る通路には、1990年代には南米系の清掃員が20名近く配置されていた。2008年時点でその数は半減し、南米系も5名まで減少したが、20年間ずっと移住労働者がそこで働いていたのである⁽¹⁶⁾。

人数の多寡を捨象していえば、「低賃金サービス職への移住労働者の流入」という、世界都市論がまさに想定する状況が新宿駅西口にはあった。理論をもって現実をみる姿勢を徹底させていけば、町村も園部も世界都市の現実を新宿駅西口に見出せたはずである。同時に、都市下層研究者にとって1990年代にもっとも重要な場所となったのも、新宿駅西口であった。そこで働く移住清掃員は、国民健康保険と介護保険以外の社会保障には入っておらず、ずっと時給計算で土日休みなく70歳過ぎまで働き続けなければならない点で、都市下層の範疇に含まれるだろう。だが、都市下層研究が野宿者研究へと切り詰められることで、移住清掃員と野宿者の接点を見出す作業や言葉は放棄され、狭い業界内部での言説生産が繰り返されてきた。

新宿駅西口に日参した都市下層研究者が、都市下層一般に目を向けるだけの視野の広さを持っていれば、野宿者のみならずそこで清掃していた人たちについて考えることもできただろう。都市エスニシティ研究者が世界都市論を自家籠中のものとしていけば、新宿駅西口で働く清掃員の出自に注目することもあっただろう。都市下層と移民研究の接点で研

究する山本薫子〔2005〕は、映画『ブレッド&ローズ』に登場する移民清掃員を、同じビルを闊歩するホワイトカラーは見ないと書いた。しかし、そうした現実を見ないホワイトカラーは他ならぬ山本だったのであり、ひいては都市下層研究者ならびに都市社会学者全体でもあったのである⁽¹⁷⁾。

ここで求められるのは、特定の集団だけに注目した研究ではなく、単にグローバル経済と都市全体を連関させることでもない。新宿駅西口という空間をトータルに解釈する視座であり、その点で都市社会学は本来有利な立場にある。すなわち、都市社会学ではなじみのある「空間」概念を召喚すれば、新宿駅西口の事例を世界都市論、都市エスニシティ論、都市下層論のいずれとも内在的に関わらせて論じることができるのではないか。社会学のメインストリームが特定の社会集団の研究であるのに対して、空間概念から地理学とのつながりも持つ都市社会学ならば、固有の貢献をなしえたはずである。

4. 都市エスニシティ論の可能性はどこにあるのか——むすびに代えて

以上、大きくは4点に分けて都市エスニシティ研究批判と、都市社会学の資産を生かした方向性の提示を行ってきた。都市社会学は、日本の移民研究でもっとも生産性の高い分野の1つであり、それゆえ本稿のようなレビューが可能になるような蓄積を持つに至っている。その特徴たるシカゴ学派の遺産の活用は、今後も都市エスニシティ研究の柱となるであろうが、現実のエスニック現象は都市エスニシティ論の器から大きくあふれてしまったのではないか。

本稿では、こうした問題意識のもとでシカゴ学派以外の都市社会学の遺産を活用する2つの方向性を提示した。第1は、犯罪社会学や新都市社会学の視角を生かして、地域社会と国家・資本の交錯という観点から、眼前の移民コミュニティを分析する方向性である。移民研究一般では、主に福祉国家と移民との関わりが論じられており、国家の介入は移民の包摂として肯定的に論じられる傾向が強い。それに対して、新都市社会学の国家批判的な分析装置を導入することで、都市エスニシティ論のみならず移民研究一般に対する問題提起も行うことができる。

第2は、「集団」ではなく「空間」に着目することで、都市社会学内部のさまざまな領域を横断するアプローチである。クロード・フィッシャーが都市度を示す変数として「接触可能な人口量」を挙げたように、都市とは多様な集団が同一空間を共有する点に特徴がある。そうした現実の都市社会を、研究者が研究対象とする集団ごとに切り刻んでしまうと、「都市社会学」は「都市社会集団の社会学」となって独自性を失ってしまう。社会学全体のなかで都市社会学が持つ強みは、集団だけでなく空間に対してもまなざしを向ける点にある。新宿駅西口の事例が示したのは、接点がないかにみえる集団が意外な形で同じ空間に組み込まれる都市社会の構造であった。そうした構造に眼を向けて初めて、都市社会学の中でさえ分断された下位分野を糾合することが可能となる。それは世界都市論のようなマクロ構造に関わる議論を「細部に宿らせ」、不可視のものを可視化する社会学の強みを生かすことになるだろう。

註

- (1) 共生について詳しくは、さしあたり樋口〔2010〕を参照。こうした傾向は、シカゴ学派に依拠する都市社会学者のみならず、マルクス主義に依拠する地域社会学者にも共通する。小内透らの調査では、

三洋電機と富士重工の企業城下町たる群馬県大泉町に居住するブラジル人と地域社会の関連が分析されている。しかし、そこでなされる分析は、「企業城下町で働く社外工」たるブラジル人としてではなく、シカゴ学派同様に「地域住民」としての側面にしか焦点を当てていない〔小内 2003; 小内・酒井 2001〕。市場と国家の相互連関を前提としてブラジル人居住を分析するはずの地域社会学も、本稿で検討する都市エスニシティ研究と同じ欠陥を持っている。

- (2) 奥田〔1993, 2004〕を参照。
- (3) その後、トランスナショナリズムを摂取した議論がなされているが、これは中筋直哉〔2005〕が示唆するように当初の問題設定とは整合的でないように思われる。この点はトランスナショナリズムとの関わりで議論する必要があるが、紙幅の都合で立ち入らない。
- (4) 奥田は「共生」という言葉を、筆者が確認した限りでは新宿調査から使用している〔1993: 309〕。
- (5) 奥田は、共生という言葉で以下のような注釈付で事実上撤回したように思われる。『『共生』の使用については、慎重である。…筆者じしんも『共生』については、『都市共生の作法』のキイ・ワードでかなり早い段階から使用してきた。しかし先述した、越境アジア系ニューカマーズを迎え入れた大都市インナーシティの柔らかな現実そのものは、『都市共生の作法』の規範概念とかなりのズレを孕んでいた…『都市共生の作法』に代わって『都市共在感覚』のキーワードを当てた（奥田 2004）〕〔奥田 2006: 115〕。しかし、そこで参照されている著作をみると、以下のように都市共生の作法という言葉で否定する記述はみられない。『『都市共生の作法』は、日本の特性とは区別される都市コミュニティの定義、『さまざまな意味での異質・多様性を内包した都市的な場において、人びとが共在感覚に根ざす相互のゆるやかな絆を仲立ちとして結び合う生成の居住世界』を導いた〕〔奥田 2004: 76〕。別の場所では、『『共生の作法』、あるいは共に在るという『共在感覚』（木村大治に拠る）についても〕〔奥田 2004: 126〕と相互互換的に用いている。これをみる限り、「都市共生の作法」に代わって「都市共在感覚」を用いたようにはみえない。また、都市共在感覚と言い換えたところで、本稿で指摘した問題点は解消されない。
- (6) 両者の関係自体、大きな理論的テーマを抱えているし、それを実証的に解明する研究は都市社会学としても重要ではないのだろうか。
- (7) 奥田の抱える問題が、都市社会学における地域社会論に通底していることについては、西澤晃彦〔1996〕の卓抜な論考を参照。西澤の批判を敷衍すれば、奥田の共生論は「地域住民としての外国人」以外の排除を帰結する。
- (8) たとえば日本と同様に移民受け入れ後発国とみなされるイタリアでも、同様の問題は起きている〔Quassoli 2004〕。それを早くから問題提起できる可能性を奥田らは自らつぶしただけでなく、2000年以降の現実と議論が乖離していく帰結をももたらした。
- (9) 本項の記述は、筆者が1997年と2005年以降に続けている鶴見居住者および鶴見居住経験者46名に対する日本とアルゼンチンでの聞き取り調査にもとづく。1999年には2週間コロンビア・オキナワを訪問し、そこでの聞き取りも背景情報として用いている。
- (10) 越境者－エスニシティという言葉が、文法的にどう成立しているのか筆者には理解できないが、原著にならって以下ではそのまま用いることとする。
- (11) この点については、SR電設に関わる記述で広田も指摘している。
- (12) これは、移民内部での連帯のみならず階層分化をも生み出す。南米では自営業者として対等だった者同士が、日本では雇用者と被雇用者に分岐していく。その点では、日本で初めて出会った者同士が多い他地域の方が、「労使関係」は複雑にならないだろう。このようなエスニックなポストと労働者の関係については、西澤〔1995〕が先駆的に指摘している。
- (13) これは、広田が調査したのが1990年代前半であるという時期の問題によるのではない。その後に行った補充調査の知見を加えた新版〔広田 2003〕でも同様の結論を繰り返しており、図式自体の問題と考えるべきだろう。
- (14) 分譲一戸建て部分を除く。
- (15) 公営団地への入居に際して親族が保証人になることを要求する自治体もあるが、これは差別ではないとしても親族が少ない外国人の入居を抑制する要因となる。
- (16) 本項の記述は、2005年から行っているアルゼンチンと日本でのデカセギ調査にもとづく。調査を通

じて 390 名のデカセギ経験者に聞き取りを行い、そのうち新宿駅西口で働いたことがある 4 名への聞き取りデータを用いている。

- (17) そうした再帰性の不足は、研究を浅薄なものにする。自らが批判するものは自らの内側に存在することは、社会学を実践するうえでの基本的な心構えとすべきことを、新宿で清掃員をしていた移住者の例は示している。

文献

- 青木秀男 2000『現代日本の都市下層——寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店。
- Castells, Manuel 1977 *La Question Urbaine*. 山田操 (訳)『都市問題』恒星社厚生閣 1980.
- Castells, Manuel 1978 *City, Class and Power*. 石川敦志 (監訳)『都市・階級・権力』法政大学出版局 1989.
- 遠藤宏一 1988『『A 企業集団』の『地域管理』』野原光・藤田栄史編『自動車産業と労働者——労働者管理の構造と労働者像』法律文化社 pp. 313-349.
- 藤原法子 2008『トランスローカル・コミュニティ』ハーベスト社。
- 樋口直人 2007「新宿駅西口の移住労働者」『Migrant's ネット』105: 18-19.
- 樋口直人 2010「『多文化共生』再考——ポスト共生に向けた試論」『アジア太平洋研究センター年報』8: 3-10.
- 樋口直人・稲葉奈々子 2010「移民自営業者によるニッチ形成と産業構造——横浜市鶴見区における南米系電設業者の進出を事例として」『村田学術振興財団 2010 年報告書』村田学術振興財団。
- 広田康生 2003『新版エスニシティと都市』有信堂。
- 岩田正美 2000『ホームレス／現代社会／福祉国家——「生きていく場所」をめぐる』明石書店。
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005『顔の见えない定住化』名古屋大学出版会。
- 北川由紀彦 2001「野宿者の集団形成と維持の過程」『解放社会学研究』15: 54-74.
- 北川由紀彦 2002a「〈ホームレス問題〉の構成——東京を事例として」『解放社会学研究』16: 161-184.
- 北川由紀彦 2002b「野宿者の貧困と集団形成」小馬徹編『カネと人生』雄山閣 pp. 245-267.
- 李 天国 2000『越境する新疆ウイグル人と中国社会』ハーベスト社。
- 町村敬志 1994『「世界都市」東京の構造転換』東京大学出版会。
- 中筋直哉 2005「都市社会学の研究動向」『社会学評論』56(1): 217-231.
- 二階堂裕子 2007『民族関係と社会福祉の都市社会学』世界思想社。
- 西澤晃彦 1995『隠蔽された外部——都市下層のエスノグラフィー』彩流社。
- 西澤晃彦 1996「『地域』という神話——都市社会学者は何を見ないのか?」『社会学評論』47(1): 47-62.
- 奥田道大 2004『都市コミュニティの磁場』東京大学出版会。
- 奥田道大 2006「都市コミュニティ研究のもう一つ先に——覚え書きノート」広田康生・町村敬志・田嶋淳子・渡戸一郎編『先端都市社会学の地平』ハーベスト社 pp. 108-129.
- 奥田道大編 1997『都市エスニシティの社会学』ミネルヴァ書房。
- 奥田道大・田嶋淳子編 1991『池袋のアジア系外国人』めこん。
- 奥田道大・田嶋淳子編 1993『新宿のアジア系外国人』めこん。
- 小内 透編 2003『在日ブラジル人の教育と保育——群馬県太田・大泉地区を事例として』明石書店。
- 小内 透・酒井恵真編 2001『日系ブラジル人の定住化と地域社会』御茶ノ水書房。
- Quassoli, Fabio 2004 “Making the neighbourhood safer: Social alarm, police practices and immigrant exclusion in Italy,” *Journal of Ethnic and Migration Studies* 30(6): 1163-1181.
- Rex, John 1973 *Race, Colonialism and the City*. Routledge & Kegan Paul.
- 酒井隆史 2001『自由論——現在性の系譜学』青土社。
- 園部雅久 2001『現代大都市社会論——分極化する都市?』東信堂。
- 都丸泰助・窪田暁子・遠藤宏一編 1987『トヨタと地域社会』大月書店。
- 都築くるみ 2004「外国人集住都市の現実から」『市民政策』36: 44-50.
- 都築くるみ 2006「外国人と多文化共生」玉野和志・三本松政之編『地域社会の政策とガバナンス』東信

堂 pp. 119-132.

渡戸一郎 2003「都市社会学ノート——奥田都市論のリアリティのとらえ方」渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ』明石書店 pp. 407-419.

渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編 2003『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ』明石書店.

山口恵子 1998「見えない街の可能性」青木秀男編『場所をあけろ!』松籟社 pp. 165-195.

山口恵子 2006「都市空間の変容と野宿者」狩谷あゆみ編『不埒な希望』松籟社 pp. 56-98.

山本薫子 2005「外国人労働者をめぐる貧困と排除——就労・居住・消費の局面で」岩田正美・西澤晃彦編『貧困と社会的排除——福祉社会を蝕むもの』ミネルヴァ書房 pp. 243-260.

山本薫子 2008『横浜・寿町と外国人——グローバル化する大都市インナーエリア』福村出版.

(付記) 本稿の経験的調査は稲葉奈々子氏との共同研究にもとづくもので、アルゼンチン調査では科学研究費を、鶴見調査では村田学術振興財団の研究助成を使用している。記して感謝したい。

(徳島大学総合科学部・准教授、higuchinaoto@yahoo.co.jp)